

エピソード1 「月曜の朝、仕事に行くと思うと憂うつになる」

香織(仮称)、30歳女性。10年前に岩手県から出てきて仙台市内の企業に就職した。事務職として働き、最近では「ようやく一人前になった」と感じていた。

XX年9月、人事異動でA男が新しい上司として着任した。大阪から配属されたA男は最初は低姿勢だったが、日が経つにつれて徐々に態度が変わってきた。2ヶ月後も経つと、その神経質で気分屋の性分が露わになった。

A男は、香織がコピーした書類を見て「斜めになってるやろ、このバカ」と激昂した。その後も些細なことで香織を責め立て、「うちの会社にこんなアホは要らん」などと同僚全員の前で名指しで香織を非難した。萎縮した香織はミスを連発するようになり、そのたびに激しく叱責されるという悪循環に飲みこまれていった。

香織の心は、いつのまにかピアノ線のように張りつめていた。自宅のソファで休んでいるときでも、ふと気付くとA男の激昂した顔が浮んでくる。そのたびに動悸が始まり、息苦しくなる。A男がどこかで自分を見張っている感じがするのだ。元気な頃は休日にはよくショッピングを楽しんでいたが、今は何をしてもおもしろくない。休日でも体が鉛のように重くて一日中横になっている。それでも疲れがとれた気がしない。夜はなかなか寝付けず、食事もうるも通らない。病状は日曜の午後から次第に悪化し、月曜の朝に頂点に達した。

一人暮らしで身近な相談相手もないし、友だちにはこんな自分を見せたくない。実家の母に電話したが、「仕事なんだからもう少し頑張きなさい」と真面目に取りあってくれなかった。

その母が、年末近くになって実家から様子を見にきた。母は、痩せほそった香織を見て、とても驚いた。母に連れられて、香織は受診した。